
憂鬱なイケメン

浅井 健二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憂鬱なイケメン

【Nコード】

N3347Q

【作者名】

浅井 健二

【あらすじ】

「イケメンですから」

部屋でひとり、鏡に向かってつぶやく俺はイケメン。美男である。

今日もイケている。

しかし、美男である俺の人生は苦難に満ちている。

全ては不細工どものせい。不細工は社会のルールを作る。不細工

のための、不細工が生きやすい社会を。美男を差別する社会を。

結果、美男は影でひっそりと暮らす。そんな生活を余儀なくされる。

俺は、一流大学を出て、一部上場企業に就職したにも関わらず、不細工達の嫌がらせのせいで職を失った。それから2年間無職。貯金ももうない。

そんな折、友人が経営するイベント会社を手伝うことになった。なんとしても、安定した収入を得て、ついでにコンパニオンをつまみ食いしたい。

さもないと二トになるしか道はないのである。

そんな美男でイケている俺の話。

どうでもいいや。

第一話

昼の二時に起きた。午後の陽は街をこうごうと照らしているはずだが、俺の住むワンルームでは、分厚いカーテンの隙間から僅かな光が射すだけだ。空気が淀んでいる。濁っているんだ。そのまま三十分、ベッドの上でぐずぐずしていたが、いい加減寝たふりをするのも限界になり、うつぶせの状態から両手をつっぱって、四つん這いになった。そこから更に五分。目は完全に覚めている。

「逃げてばかりはいられない」

俺はそうつぶやいて、電気の紐をひっぱった。パパッと数瞬、白い光が点滅して蛍光灯の光が室内を照らす。無気力な明るさが満たす室内で、俺は煙草に火をつけた。ブラックの缶コーヒーが飲みたいが、マンション下の自動販売機まで買いに行くことを想像し、心が折れた。裾をしぼってあるダサイシルエットのスウェットのパンツ。五年は着ているユニクロのフリース。その上にひっかける上着は十年前に買ったコロンビアの鼠色ダウンだ。くたびれている。それに、当時ちよつと流行ったものだけに、今でもそれを愛用しているということが恥ずかしい。そんな恰好で部屋を出て、スーツを着た美人OLにでも出くわしたらどうすればいいだろう？ 別にどうする必要もないが、俺は我が身の侘しさが身に染みて嫌な気持ちになるはずだ。そんなリスクを犯す位なら、缶コーヒーくらいは我慢したほうがいい。

「しかし、このまま逃げたばかりはいられない」

俺はそうつぶやいて、洗面台へと歩いて行った。蛇口脇の取っ手を温水が出るように左に廻し、上へ捻って水を出す。二十秒ほど、

真水が温水に変わるのを待つてまずは手を洗った。次に顔を洗う。そして、顔を洗面台につっこみ、髪をびしゃびしゃに濡らす。水滴をタオルでぬぐった後、頬の髭、ラインからはみ出した眉毛、鼻毛を毛抜きで丁寧に抜いた。毛の引っ張られる僅かな痛みが徐々に頭をクリアにしていく。百本の毛を抜き、気分がよくなった。ドライヤーとブラシで、髪に荒く癖をつける。ワックスを手のひらに塗りたくり、指先で髪の毛の根本をつまむ。つまんだ髪の束を立たせるように固定する。横髪は斜め後ろに跳ねさせ、後ろ髪はくしゃくしやにする。三十年の経験でわかったことは、髪の毛全体にワックスをつけてはいけないということだ。ワックスで形を固定するのは親指と人差し指で撮める一束分、根元を中心にひっぱるようにつける。そういう束をフロント、トップ、サイド、バックとあわせて三十束ほど作ると、髪の毛本来の流れの中に、人工的に作った流れができていい感じに仕上がる。「遊び」のあるスタイルになる。

俺は、鏡の前で顔の角度をいくつか変えて見た。さらに、小さな手鏡を手に持ち、合わせ鏡をする。横と後ろも確認。満足した。完璧である。

「イケメンですから」

鏡を見ながら、そうつぶやいた。クールに。

そう言つと、まるで俺が何の脈絡もなく、自分のルックスを賛美したように聞こえるかもしれない。お前は、俺の頭、精神が正常なのかと疑うかもしれない。違う。これはシュミレーション。そう言えれば納得してくれるだろうか？

例えば、美人の看護師かなんかが俺に言ってくる。

「安田さんってかっこいいですよね」

ここで、俺は眉一つ動かさずにさりとってのける。

「イケメンですから」

どうだ？

カッコいいと思うか？ イケてるか？

とは言え、実は、俺自身この答えが正解かどうか確証がない。俺が美男であることは事実。しかし、自分で自分のことをイケメンと言う男に世間はどのような評価を下すだろうか？ 優しいだろうか？ 飴でもくれるだろうか？ いや、ガリレオは地球が廻っていると言ったがために裁判にかけられた。社会が事実を求めるとは限らない。人は真実を口にすればいいってもんじゃない。俺だって真実なんてものに興味はない。それよりも社会に迎合して、ぬるく幸せに生きたい。

それと、もうひとつ。イケメンという言葉の響き。イケメン。美男を指す言葉として、マスメディアによって市民権を得たが、言葉が軽い。薄っぺらい。そんな言葉を喜んで使っているようでは、俺の教養、知性が疑われる。

美男マイナス知性イコール、ゼロー。となる可能性はある。じゃあ、イケメンという言葉は避けよう、と、なるかという話はそう単純ではない。俺が話す相手のほうが、中身ゼロ、知性ゼロの薄っぺら人間、そういう場合も意外に多い。その時は、知的レベルをあわせて、積極的に「イケメン」という言葉を使っていたほうが好感をもたれるかもしれない。小難しい知性よりも、あえてバカな男、軽い男を演じたほうが、好印象を与える可能性もある。

とは言え、総合的に考えると、自分で自分のことをイケメンと言ってしまうのは、いけすかない気障男と勘違いされるリスクを内包しており、避けたほうが無難である。

「いやいや、そんなことないです」

実に謙虚。すばらしい。飾らない。男の中の男だ。しかし、ひと

つ問題がある。俺はイケメンである。美男である。世間の人がそう認識し、俺自身そのことを自覚している。心の底から「そんなことない」と言えるだろうか？ 無理である。薔薇は薔薇であり、百合は百合である。そして、俺は俺、俺はイケメンである。その動かしようのない事実を前にして、「そんなことない」と口先だけで否定をした場合、本心からは言っていないことがきつとばれる。すると、積極的肯定よりも、印象を悪くする危険がある。「こいつ、自分で自分のことをイケメンと思っているくせに、口先だけで否定しやがって、とんでもないナルシスト男だ」と思われ、人格を疑われてしまう。それに、俺は自分が美男であることを否定したくない。

「ありがとうございます」

なかなかいいんじゃないか。実にシンプル。そして、自分が美男であることをちゃんと肯定できている。なおかつ、謙虚である。自分のルックスに関する話題をなるべく早く切り上げようという姿勢が醸し出されている。さらに言外のニュアンスがいい。わかるだろうか？ イケメンと言われることは日常、人生の一部。この世に生を受けてから幾度となく美男であることを称賛されてきた男の美男の歴史が凝縮されているのである。ベストだ。ベストな解だ。ベリーベスト。

俺は、その後、何度か「ありがとうございます」と口に出して言った。ポイントはさらり感。なるべくさらりと口にして、いつも言っている言葉であると思わせることが重要なのである。これを聞いた美人看護師はどう思うだろうか？ きつと、俺の飾らない人柄まで含めて好感を持つだろう。好きになるだろう。

第二話

時計を見るといつの間にか目覚めてから一時間半が経過していた。午後四時だ。一体、一時間半も何をしていたのだろうか。

「うかうかしている場合じゃあねえ」

等身大の姿見を見ながらつぶやいた。木製のフレームはホワイト。今日の六時に赤坂見附で待ち合わせがある。二時間後である。俺はリーバイスの五〇ーをはいて、avvのブラックジャケットに袖を通した。インナーはアニエスベーの黒いVネックTシャツ。イケている。似合っている。着こなしている。俺は、ファッションマスタ―安田。そう呼ばれたことはないけれども。

ファッションマスタ―はポケットに数年愛用しているルイビトンの黒革の財布、バーバリーのハンカチ、携帯電話、煙草とライター、プラダのキーホルダーをつけた部屋のカギを入れ、レッドウィングのエンジニアブーツをはいた。鉄製のドアを開けて外へ出る。エレベーターで一階まで降りて、エントランスから空を見上げる。そこにはただ空があるばかり。イチヨウの葉っぱはまだ緑色。

赤坂見附へ行くためには、まず目白駅へ行く。俺の住む山手線内側の賃貸マンションからは、目白通りを歩いて十五分。護国寺駅へ行くという選択肢もあるが、歩くと三十分かかってしまうので、迷わずに目白駅へ向かった。駅に着く直前に学習院大学正門を通過する。

「別にかまわないのに」

何がかまわないか少し説明が必要かもしれない。俺はたった今八

ンカチを落とした。意図的にだ。何故かと言うと、学習院大学の学生と思われる女とたった今すれ違ったからだ。すれ違う直前に、女にわかるようにハンカチを落とした。女の髪は茶色く染められて、コテでくるくると巻かれていた。伏し目がちな目はまつ毛がくるりと上を向き、鼻筋が通っていたし、白い肌には、頬紅が塗られていた。キャメルのコート。黒いブーツ。魅力的な女。エロい女。このドスケベ女は俺との出会いを求めている。そう察した俺は出会いを演出してやるべくハンカチを意図的に落としたのである。

女は「ハンカチ落しましたよ」と言っ、俺のもとへ駆け寄ってくるだろう。そこで俺は言う「別にかまわないのに」と。

もちろん、一般的には落し物を拾ってもらった人に対して、最初の言葉は「ありがとうございます」である。しかし、それでは芸がない。「ありがとうございます」だけでは会話が終わってしまうし、たとえ、その後、強引に「ところで……」と話を続けたとしても、せっかく演出された出会いが、安っぽいナンパのような雰囲気になってしまう。なので、「別にかまわないのに」と言うことに決めた。そして、ちよつと受け取るのを躊躇してみよう。そうするとどうなるであろうか？ きつと女は「でも……」と言っ、ハンカチを俺に押し戻そうとするであろう。ここで、頑なに拒否するのも変なので、「じゃあ……ありがとうございます」と言いながら嬉しそうな顔をする。そして「実はとても大切なものなんです」と情報を足してみる。そうすると女は不思議に思うはずだ。「この人はなぜ、とても大切なハンカチをすぐに受け取ろうとしなかったんだろう？ このハンカチには何か秘密が、ドラマがあるのかしら？ 知りたい。すごく知りたい。この人のことを知りたい」と。女の中では俺のミステリアスな魅力がスパークしている。そこで、ミステリアスな俺はすかさず言う。「何かお礼がしたいのですが、よろしければ、携帯番号を教えてもらってもいいですか？」女は一瞬やはりナンパかと

思い躊躇するが、実は悪い気はしていない。俺は言う。「目白駅を超えたところに、美味しいパスタ屋があるので、今度、ぜひランチでも御馳走させてください」女なんてたいい王様のランチに出てくるような美味しくてこじやれたランチとイケメンのことしか考えていないので、表面上しぶった様子を見せながらも結局はOKする。というよりも、最初から俺に携帯番号を教えるという結論は出ているのだ。しかし、女にとってはそこに至る過程が重要で、ちょっとした偶然、男のちょっとした強引さ、そういう要素により仕方なくつきあってしまった。私は全然そういう気はなかったんだけど、成り行き上一緒にランチを食べて意気投合してしまった。セックスをしてしまった。そういうストーリーを求める。何とも面倒臭いが、俺はそれに付き合う度量をもっている。究極のフェミニストなのだ。

そして、俺は、後方に意識を集中し、女が声をかけて来るのを待ちながらすたすたと歩いているのであるが、女は一向に俺にハンカチを届けに來ない。しかし、ここで振り向いたりしてはいけない。俺は、わざとハンカチ落としたのではない。気づかずに落としたのだ。落としたことに気がついていないのだ。そういうストーリーなのだ。現在、俺の視界には六人の歩行者が見える。俯きながら歩く学生風の若い男が三人。五十代くらいの主婦、学習院大学の守衛、そして、野暮ったい女子高校生。もしここで振り向いたら、まるで俺が、女子大生の気を引こうとわざとハンカチを落としたように見えてしまう。そんな事態は避けなければならない。何故なら恰好悪いからだ。しかし、女は一体どういう教育を受けてきたのだろうか。目の前で人がハンカチを落としたら届けに來るのが普通ではないか？ それを無視して通り過ぎるとは、どうかしている。常識を疑う。俺が困っているとは考えないのであろうか。

第三話

結局俺は一度も振り返らないまま、歩き続け、目白駅に着いた。

女はハンカチを届けに来なかった。目白駅は池袋から山手線を一駅、南に下ったところにある。ターミナル駅でないので、デパートや、駅ビルなどの大きな施設はない。それでも、学生や主婦、サラリーマン、何の仕事をしているかわからない人などで、それなりににぎわっている。俺は、駅前の広場にある時計に目をやった。現在、四時十五分である。このまま、山手線に乗り、新宿で丸の内線に乗り換えれば赤坂見附には五時前に着くだろう。待ち合わせは六時なので、一時間以上待つことになる。飲みたくもないマックのコーヒーが何かで時間を潰すのも退屈だし、一〇〇円がかかる。電車代もJR代の一五〇円が余計にかかる。それならば、有楽町線護国寺駅まで、ちんたらと四十五分ほどかけて歩いて行き、永田町までメトロを使ったほうが、二五〇円分節約でき、経済的合理性がある。コンビニで立ち読みでもすれば、ちょうど六時くらいに着くだろう。一瞬で判断し、俺は元来た道を引き返すことにした。

「何やってんだか」

小さくつぶやいてみる。

全く何をやっているのだろう。

別に、目白駅まで十五分歩いたことが無駄になったということだけではない。ここ最近の俺は常にそんな感じなのだ。原因はわかっている。仕事をしていないからだ。社会から理不尽な排斥にあい、職を奪われた。その後、無職のまま二年がたっている。それというのも、俺が美男だからだ。俺は美男であることで、いつも損ばかりをしてきた。才能もあるし、努力も人一倍した。それが証拠に、厳しい受験勉強をクリアし、一流大学に入学した後、一部上場の証券

会社に入社するという快挙をなしている。しかし、社会は美男に冷たかった。会社では美男である俺を妬んだ不細工な同僚、上司どもの、嫌がらせにより、会社へ行くのがバカバカしくなってしまう、二年前退職をした。世の中は美男が頑張ったところで、報われないのだと、五年間の会社生活で悟った。社会は不細工が不細工のために作っている。ルール化はされていないが、そうなのだ。おそらく、不細工達はそんなことを意識することすらないだろう。しかし、一度、美男が不細工のコミュニティに、侵入すると、異物排除プログラムが働く。俺は、男性社員であるにも関わらず、お茶くみをさせられたり、委託している清掃業者がいるにも関わらず、「業者さんの苦劳もわかってないといけない」などと、よくわからない理由で便所掃除をさせられたり、挨拶を無視されたりと、地味な嫌がらせを受け、徐々に神経を消耗していった。退職時、貯金や退職金やらで、五百万円ほど手元にあつたので、しばらく働く必要はなかった。しかし、それもこの二年間の生活で食いつぶしている。このまま、働かなければおそらく、二カ月後には今の賃貸マンションは家賃滞納で追い出されるだろう。そうすると、実家に戻ってニートをするか、友人の家に居候をしてニートをするくらいしか選択肢はない。

そして、あまり向きあいたくはないのだが、特に、ここ二週間、俺の気持ちを暗くしているのが、先々週の土曜日にあつたプチ同窓会での出来事だ。大学の学生寮にいた時の仲間五人で、久しぶりに集まり、楽しい会になるはずだった。事実最初は楽しかった、仲間の中でも特に不細工な吉川に彼女ができたと見栄をはるので、みんなでその嘘を暴きながら盛り上がった。しかし、夜十一時を回ったころから、みんなが仕事の話をしだした。

「田村は開業医にはならんの？」田村は医師試験に合格し、現在大学病院の勤務医である。

「戸塚はどの交番にいらんだっけ？」戸塚は、警察庁に入庁し、警察官になった後、巡査部長試験に合格し、現在は交番をひとつまか

されている。

「俺なんてしがない経理だわ」亀村は、大手飲料メーカーで経理を担当している、まだ二十九だが、すでに一生勤め上げようと決心している安定した男である。

「安田は？」俺のことである。俺はなるべく、明るい口調になるよう心がけて、言った。「俺？　俺は今、次のステップに向けた準備期間みたいな」

「何それ？」

「いや、会社辞めたんだよね。やりたいことがあつて」嘘である。やりたいことなんてない。

「へえ。それって何？」

「それは内緒」そもそもそんなものないのである。

「本当はただの無職なんだろう」当たらずとも遠からず。というか、的中である。

「いや、ちよつと今はまだ言えないけど、まあ、そのうち報告するから」

「お前は昔から駄目なやつだったもんな」

そう言つて、みんながゲラゲラと笑つた。

ちよつと待てと言いたい。俺は昔から駄目なやつだったのか？　そう思われていたのか？　俺が今こうしているのは、お前達にはそうなるべくしてそうなたように思えるのか？　もしそうなら、俺のこの美しい顔のせいだろうか。俺は顔という社会不適合者のサインを、社会に公表しながら歩いているようなものなのだろうか。そんな俺にこれから人並みに生きていく術はあるのだろうか。俺は、そう言つてみなを問い詰めたかったが、みんなに笑われたことで、ことのほか、深いダメージを受けて、沈み込んでしまった。その場は周りに同調して笑つてごまかしたものの、それから、ほとんど、言葉を発せずその後逃げるように、岐路に着いたのである。

それから、二週間、暗い気分を引きずつて、家からほとんど出ず

に、インスタント食品を食べ、漫画を読みながら、過ごしているのであるが、昨日の晩、会合には出席しなかった山中から電話があった。話があるから、時間を作れという。それが今日の待ち合わせだ。本当は人に会いたいような精神状態ではないのだが、山中の口調が、少し強かったため、押し切られてしまった。

目白通りを延々と歩いて行く。俺の落としたハンカチはすでに道に落ちていなかった。二十分ほど歩いて、名前がわからない公園を横切る。この公園は見晴らしがよく、知る人ぞ知る、隠れた夜景スポットだ。ドラマのロケに使われたこともある。少し立ち止まって景色を見ると、西に沈んでいく太陽が見えた。街は、わずかに赤みがかかっている。直にオレンジに染まり、群青を経た後、夕闇に落ちるだろう。マンションの間、数メートルからだけ、覗ける景色。東京の街の何でもない一日。今日も不細工達が頑張って社会を運営させている。美男は陰でひっそりと息を潜め、暮しているのだろう。俺のように。

目白通りをショートカットし、講談社の高層ビルを目印に音羽通りを目指す。護国寺の駅前にある、ファミリーマートに着いたのは、計算通り五時ちょうどだった。そこで三十分ほど「ジャンプ」「マガジン」「モーニング」などを立ち読みして、メトロに乗った。さあ、行こう。赤坂へ。いや、赤坂見附へ。

第四話

轟音とともに走る地下鉄に乗って、しばらく窓に映った自分の姿を見ていた。が、地下鉄の窓は映るものを必要以上に暗く見せる。俺の顔も暗い。気持ちも暗くなるばかりだ。乗客達は一様に携帯電話を弄っている。きっと自分の顔を見たくないのだろう。当たり前だ。地下鉄の窓は、ただでさえ納得のいつていない顔を三割り増しに不細工するから、そんなもの誰も見たくはない。液晶ディスプレイに呼び出したキティちゃんやリラクマでもみていたほうが随分ましだ。

メトロは江戸川橋の駅を超え、飯田橋を過ぎ、麹町にさしかかる。そういえば、俺はこの駅から大学へ通っていたことを思い出した。今では遠い昔だが、俺にもかつては大学生だったこともあり、学友と一緒に勉学に勤しんでいた。いや、本当は大学にもほとんどいかなかったし、勉強も全くなかった。友達と呼べる人間もいなかった。ただ、大学には在籍し、時々は行っていた。それだけは一応本当だ。そして、大学とも、大学生活とも全く関係ないのだが、麹町には「麹町の主」と呼ばれるかなりインパクトのある浮浪者がいた。初めてヌシを目撃した時、「あやかし」や「もののけ」など、人外ものを都市に見つけたように、戦慄を覚えてしまった。ヌシはとにかく汚れていた。その汚れかたは、常識の範疇を圧倒的に超えていた。

着ている上着は、もともとは緑色のミリタリージャケットだったのだと思うが、すさまじい汚れで黒く変色していた。ヘアは伸びっぱなしで、おそらく十年単位で洗っていなかったのだろう。完全に一本の太いドレッドと化していた。それを、ちよいと小首をかしげ、ぶーらんぶーらん揺らしながらノロノロと歩く。その様は妖怪のよ

うであり、鬼のようでもあり、神のようでもあった。神の目で、人間社会を見たらどう映るのであるのか？ 又シはその答えを知っているようにも見えた。俺は、又シを麹町から上智大学前の公園辺り、およそ、三百メートルほどの区間でたまに見かけた。本当はもつと広範囲にわたって活動していたのかもしれないが、俺の活動範囲と又シの活動範囲の交わる場所が、おそらくそのエリアだけだったのだろう。俺は又シと言葉を交わしたことがすらないし、又シも俺のことを風景の一部としてしか認識していなかったと思うが、時として「麹町」とか、「ミリタリージャケット」とか、特定のワードに触れると、関連して又シの記憶がよみがえってくる。

そういえば、俺が又シを注目するようになったのには、もうひとつ原因があった。あれは、一年生の初夏、本格的な夏の訪れを感じさせる、気持ちよく晴れた日の午後だった。テスト期間の最終日、俺はひとつ残った試験を受けるためにひとりで大学へ行っていた。大学はほとんど夏休みに入ったようなものだったので、部活やサークル活動目的の頭のおかしい学生がパラパラといるだけだった。又シは大学前の公園で水道の蛇口をひねり水浴びしていた。どこで処理をしたのか、一本ドレッドはばつさり切られて、短髪になっていた。蛇口から流れる水に頭をつっこんで、シャンプーするように両手で頭をかきむしる又シ。しばらくして、顔を上げた。初夏の日差しを浴びて、水滴を振り払ったその顔は、美男であった。又シは美男であった。逆に言えば、ある美男が、人生を転がり続け、最終的に「麹町の主」になったということでもある。それならば、同じく美男の俺はどうなるのだろうか。俺も、いつかは浮浪者と成り果て、さらには、妖怪のたぐいと間違われるような、ことさら汚れた存在になる日がくるのだろうか。神なのか、鬼なのか、人外となる日が来るのだろうか。うつすらとそんなイメージが浮かんだが。あまりの現実感のなさに、すぐにそのイメージをデリートした。しかし、一度思い描いたイメージは心のどこかには残っているはずであ

る。普段は忘れて生活するだろうが、何十年かの後、ふとしたことで甦って来るものなのだろう。完全に消し去ることはできない。

第五話

電車は永田町に着いた。それから地下鉄駅構内の階段を登り、降り、歩き、十分ほどして、赤坂見附についた。赤坂見附は帰宅ラッシュ前であるにもかかわらず、仕事を終えたサラリーマンやOLが無表情で歩き、それなりの混雑をしている。視界に入るのはスーツデパートで買った高級ブランドスーツ。量産された安物のスーツ。スーツ。スーツ。ジャケット。スカート。それを着る人間は不細工ばかりだ。生きる価値もない。しかし、それでも世界は不細工が決めたルールで、不細工なオペレーターの監視のもと、運営されている。俺のような美男はその中には入れてもらえない。行き交う人々は知り合いではないから、言葉を交わし会うことすらない。それでも、テレパシーや念で、概念の共有をしていることだろう。世界は不細工のためのもの。ルールを決めるのは俺たち不細工。なのだと。

赤坂見附駅出口で行き交う不細工の顔を眺めながら待つこと十五分。「わりいわりい」と言っ、山中がやってきた。山中とは十九歳の頃、学生寮に入ってから以来の付き合いだ。相変わらずぼつちやりの髭面、モジャパーマの不細工で、おにぎりに似ている。少しでもスリムに見せようと思っているのか、細身のブラックスーツに体を包む。海苔だ。俺から見ればどんなに努力をしたところで不細工は不細工なのだから、滑稽なことこのうえない。どんな努力も時間の無駄、金の無駄。そんなところに貴重なエネルギーを使うなら、英会話を習うなりして、もっと自己研鑽に励めと説教をしたい。お前は外見でなく中身で勝負をしる。たとえば鮭だ。

「山中、お前TOEIC何点だ？」

「何だ？ 急に」

「いやちよつと気になってな。何点？」

「何なんだ？」

やっぱり、自信がないから答えられないのだろう。予想通りの馬鹿なやつだ。別に山中のTOEICスコアが何点だろうが、俺には全く関係ないし、低い点数だと確認できたところで、そのことで、山中を攻撃しようという気はない。ただ、人が自分よりも劣っていることを知ると、少し気分がよくなるので何としても聞き出したくなつた。

「いいじゃん。教えてくれよ」

「八八〇点」

俺は一瞬膝が震えたあと「へえー。すげえじゃん」と言ってみた。しかし、内心穏やかではない。俺のスコアは五年前に取得した七二二点だ。かなりいい点数だ。しかし、山中は俺より百点以上も高いスコアであるという。信じられない。

「お前は？」

山中はいけしゃあしゃあと聞いてきた。おそらく自分のスコアが、俺よりいいという確信があるのだろう。あえて自分の得意な分野で人と比較し、少しでも優位に立とうとする。なんてひねくれた根性だろう。いや、もしかしたら八八〇点というのは嘘かもしれない。いやきつとそうだろう。旧友を前に少しでも自分をよく見せてちっぽけな自尊心を守ろうとしている。なんて哀れな男だろうか。こいつにはそういうところがある。

その時、ジーパンにグレーのスウェットシャツを着た大柄、でぶつちよ、不細工白人青年が寄ってきた。足元はださいトレッキングシューズのようなものを履き、YのようなNのような文字が表面に刺繍された野球帽をかぶっている。いけすかない野郎だ。不細工白人は、困った表情を浮かべ山中に話しかけた。

「エクスキューズミー？」

白人男の眉間に大袈裟にこさえられた皺を見ながら、俺は、これは面白い展開になったとほくそ笑んだ。欺瞞に彩られた哀れな男。

山中なにがし。今、その虚像が剥がれ落ちる。真実と恥が往来の目の中にさらされる。絶妙のタイミングだ。山中は間違いなく英語が話せずにわたわたして、「アイキャントスピークイングリッシュ」などと、敗北を宣言するに決まっている。しかし、俺は助け船を出してやる気はない。TOEIC八八〇点という嘘で、自分をよく見せようとした山中の自業自得であるし、そもそも俺は英語が話せない。七〇〇点を超えたことだって五年前に一度あったきりだし、あの時は、問題も読まずマークシートを黒く塗りつぶしていったら、たまたまそれらが、ことごとく正解になるという偶然の要素も関わっていたからである。

「ヤー」山中は即座に答えた。

「ドウユノウ、ウェアリスロップンギ？」不細工白人が流暢な英語で返す。どう出る？山中。

「アー、ユウオントウゴウバイトレン？」なんと。山中。意外にも受けの太刀。

「ヤ」

「ソウ、ユハフトウ……」

俺は、彼等の会話を追いかけるのをやめにした。不愉快だ。だいたい、不細工白人男がどこへ行くのか俺の知ったところではないし、山中も俺と一緒にいるのだから、見ず知らずの男との会話なんてそうそうに切り上げるべきなのだ。それを、ますます話はずんである。楽しそうにマーケティングだの、セクシヨンだの、アナルファックだのよくわからない単語まで駆使し、会話を長引かせている。

俺はすることもなく、壁にもたれ掛かり、携帯電話を開いた。一人きり、画面を眺めるふりだ。ああ、楽しいな。携帯電話の液晶ディスプレイ。いや、空しい。パケット通信料が惜しいから、インターネットアクセスはしないし、俺にはメールを送ってくれるような友人も恋人もない。ただ電卓で無意味な計算をするだけだ。五十五＋六十六＝百二十一。五分ほどしてやっと二人は固い握手を交わし「バーイ」と一言って別れた。

山中は俺を長時間待たせたことにたいして詫びの一言もなかった。その表情には英語を話せる俺はどうだ？　すごい？　と言わんばかりの優越感が浮かんでいる。とんでもないナルシスト男だ。

「あの人、今から六本木のクラブで皿回すんだってさ」

俺は、不細工白人が一メートルほどの木の棒の上に皿を乗せ、くるくる回す様を想像した。想像の中の彼は和服を着せてもらってすこぶる上機嫌だ。日本かぶれミーハー外国人だ。馬鹿丸出した。はつきり言って国の恥である。俺は、成人した男達が「おーゲイシャ」「おーフジヤマ」「おードラゴンボール」と、日本のカルチャーに現を抜かしている国を哀れに思った。そんな国、すでに滅びたも同然である。沈みかけの船からネズミが逃げ出すような明確な滅亡のサインである。

第六話

「とえりあえずどつか入るか」という山中の言葉に従い、山中の案内で五分ほど、仕事終わりのサラリーマン達の流れに逆らい、赤坂の街を歩いていく。視界に入るのはパチンコ屋、焼肉屋、居酒屋、カラオケ。夜のネオンなんて久しぶりに見るので少し気持ちが高ぶる。

「ここ」と山中が指差した店は「秀」という名のこじんまりとした居酒屋だった。決して高級な感じはしないが、店の外観は清潔で、木の看板に達筆で店名が描かれており、三十を超えた男が落ち着いて飲むには適しているように感じられる。

山中は横開きの扉をガラガラと開けて「こんにちは」と店内に告げた。店のおばちゃんが「あら、いらっしやい」と出迎える。その笑顔は、一見さんに向けられるものと比べると、随分砕けた感じがあり、山中の落ち着きから考えてもおそらくこの店の常連なのだろう。「おばさん。これ、俺の学生時代の友達」「あらおんなじ大学？」「いや、学生寮のほう」「あら、よろしく。お友だち格好いいわねえ」「だつてよ」と山中は俺のほうに顔を向けた。

「ありがとうございます」と練習通りに言う俺。たしかに格好いい顔が格好いいことは周知の事実だが、心模様も素晴らしい。男前であることを微塵も鼻にかけずさりとしている。それにしても、ルックスについて誉められることはよくあることなのだが、気分がいい。何度言われても飽きることはない。おにぎり男の山中なんかはこんな気持ちを味わったことはないだろう。そして、おそらくこれから、味わわぬまま死んでいくのだろう。なんて不幸な人生だろうか。

「こちらのテーブルでいいかしら」おばちゃんは店に六つしかないテーブルのうち、入り口から遠い窓際のテーブルを案内した。山中

は「ありがとうございます」と言って、テーブルに向かう。こじんまりとした店内には中年サラリーマン四人連れと、OL二人組がそれぞれ、静かにテーブルを占拠している。どちらもしょぼくれている。生きる価値もない。

「生でいいか」

「ああ」

「じゃあすいませーん。生ふたつ」

「はい」

おばちゃんは電光石火のスピードで生ビールを中ジョッキに入れて持ってきた。

「先に頼んじまおう。適当に頼むけど、何かリクエストはあるか」

「いや、まかすよ」

「じゃあ、串盛り合わせ二人前と、ねぎわんたん。あと、エビマヨ」

「はい。串盛り合わせ二人前と、ねぎわんたん、エビマヨね。寮の友達ってことは田村君とか、戸塚君と同じ」

「あ、そうそう。一緒の友達」

「今度また連れてきてね」

「はい。あいつらもこの店気に入っているから、喜んでくると思うんで」

おばちゃんは笑顔を残して、キッチンでせわしなく働くエプロン姿の若者にオーダーを伝えに言った。

「田村とか戸塚とよく来るの？」

「ああ、ええと。三回くらい飲んだかな？」

「へえ？まあ、別にいいけど」と、言いつつも、自分がはぶられた気がして気分がよくなかった。じゃあ、誘われればいくのかと問われると俺は結構な確率で断る。暇そうに見えても将来のことを考えたり、世界平和のことを考えたりで、色々忙しいのだ。じゃあ、誘わないでいいじゃないかと思われるかもしれないが、それはちよつと違う。田村や戸塚、山中達が集まって飲むのであれば、俺にも声はかけるべきなのだ。行くか行かないかは、その日の気分で俺が

判断する。しかし、俺は器の小さい男ではない。そのことで、山中を攻めもせず、何でも無い風を装う。

「じゃあ、乾杯すつか」

「何に？」

「何でもいいよ」

最適な言葉が見つからないまま小さく「おつかれー」と言い合い、ジヨッキの淵をコツンと会わせた。並々と注がれたビールをぐいと喉に流し込む。ビールは最適な温度に冷やされていてうまかった。まるで水のようにアルコールが入ってくる。何杯でも飲めそうだ。

「で、今日呼び出した理由なんだけど、お前さ。今仕事してないらしいじゃん。聞いたぜ」

山中が話し出した。嫌な話題だ。

「何でそれ知ってんだよ」

「田村から聞いた」

まあ、そうだろう。別に田村達に口止めたわけじゃあないので、自然と山中の耳には入るだろう。

「別によかつぺよ」

何故、俺は茨城弁なのだろうか？

山中は間をおかずに言った。

「よければ俺の会社手伝わないか」

そう言えば、山中も俺と同じように、新卒で勤めた大手広告代理店を辞めたとは聞いていた。堪え性のない駄目な男だ。しかし、その後、ちやらちやらと会社を立ち上げ、仕事ごっこをしているというらしい。これはいつか説教してやらなければいけないと思っていた。まあ、山中ごときがお遊びでやっている会社がうまくいくはずはなく、俺に助けを求めてきたというわけだ。分相応に振る舞わなければこういう目に遭う。

「何の会社」

「まあ、広義で広告代理店かな。よく、携帯電話会社の街頭キャンペーンって、コンパニオンがケータイショップの前で、ティッシュ

配ったり、マイクで商品紹介してるの見るだろう。あれを携帯キャリアとか、ケータイシヨップから委託を受けてやってるんだよ」

その話を聞いただけとんだか、華やかで楽しそうな業務内容だ。おそらく、面接と称してコンパニオンをつまみ食いしたり、労を労うといいながら、食事に誘い、そのまつまみ食いしたりなんてこともあるのだろう。そういう仕事であればぜひ、やりたい。

「やる」という言葉が喉元まででかったが、俺はその言葉をぐいと飲み込んだ。あまりに返事が早いと、まるで俺が仕事に困っているように思われる。それはなんだか格好が悪い。できれば、やりたいことが他にある、夢を追う、またそれを実現する能力もある素晴らしい男なのだけれど、山中に頼られ、仕方なく仕事を引き受けるという体を装いたい。

「俺にはやりたいことがあるんだよ」

「そうか、じゃあこの話は聞かなかったことにしてくれ」

「ああ。すまん」って話が終わっているではないか。

俺は、膝をガクガクさせながらもさりとて言う。

「で、例えば、俺が仕事を手伝うとして、主に何をさせようと思ってる？」

「やらないんじゃないのか」

「いや、やる可能性もある。可能性の問題だ」意味がわからない。ぐだぐだだ。

「そうか。まあ、そうだな。まずは現場ディレクターってやつで、イベントを実施する店舗と事前に打ち合わせをして、イベント当日に3人のコンパニオンを仕切って、トラブルないように運営する仕事からスタートかな。それがうまく行ったら、営業と全体統括。携帯キャリアとかメーカーに出向いて、仕事をもらうのと、多いときは一日に何10箇所かでイベントを同時進行するから、全体管理をしてもらいたい。最終的には、イベント以外のビジネスにも仕事を拡張していく予定だから、イベントの仕事を全部任せられるようになってくれれば、俺としてはかなり助かるんだけどな」

俺は、そんなにいつぺんに説明を受けても、いまいち仕事のイメージがつかめなかったが、そのことがばれて「やっぱりこの話はなかったことに」となつては困ると思い、わかっている表情を繕つた。「なかなかシビアだな」

一体何がシビアだ？ 自分で言っておきながら全く意味不明だ。

「まあ、まずは、お前がこの仕事に楽しみを見いだせるかどうかなんだよな。一回、イベントにスタッフとして参加してみないか？ 判断はそれからでもいいから」

「そこまで言うなら一回参加してみるか」

「そこまで言つてないけど、ぜひ頼むわ」

「そこまで言うなら」

「だからそこまで言つてないって」

こうして俺は、一度山中の仕事を手伝うことになった。

そして、俺達はしこたま飲んだ。

勘定は山中の顔をたてて山中に出してもらうことにした。

第七話

八日後。

二〇一〇年十一月五日金曜日朝五時。

俺は目が覚めた。いや、覚めたのではない。覚めたのだ。

俺は目を覚ました。

今日が山中から紹介された仕事の第一日目である。まずは、仕事
が自分にあっているかどうかを見極めることが目的なので、雇用形
体は正社員ではなく、アルバイトとなる。その手続きは先日済ませ
た。三十を過ぎてアルバイトをするというのは少し格好悪い気もす
るが、俺はそんな小さなことにはこだわらない。逆に、山中の元で
働くことにこだわっている。その主な理由は、のんびきならない我
が家の経済状況だ。ここ数年無借金経営を続けているものの、月々
の歳入〇円、歳出十五万円では、破綻は目に見えている。福祉を削
減し、デフレ政策を敢行するも抜本的な改革にはほど遠い。

美男というものは金に困るものなのだ。その、金がないことから
来るアイロニーがまたかつこいいのではあるが、死んでしまう。

だから、俺はなんとしても仕事を確保せねばならない。

今日の仕事で、「安田はこの仕事向いてるなあ」と、山中に印象
付けねばならない。「やはり、俺の目に狂いはなかった。安田こそ
会社の救世主だ」あいつはそう言うだろう。

俺はメシヤ。どうだ？

俺は、髭を剃って、髪をセットした後、コムサデモードのタイト
な白シャツをチノパンにインした。このままでは、野暮だったので、
薄手のカーディガンを羽織り、首にはおしゃれな布を巻き付けた。
鏡の前でポーズをとる。

イケている。

「ありがとうございます」

「えっ、本当ですか？　ありがとうございます」

「ははっ、ありがとうございます」

数パターン練習した。

今日は「安田さん。イケメンですね」と言われるだろうか。言われるだろう。

その後、姿見を見ながら煙草を吸った。俺が、煙草を取り出すところ。俺が煙草をくわえるところ。俺が、煙草に火をつけるところ。俺が、俺が。俺は全て見逃さなかった。

イケている。

時計を見ると七時になっている。俺は二時間も何をやっていただろうか？

今日は四ツ谷駅近くのハードアクセスショップ四ツ谷店のイベントを手伝う予定だ。ハードアクセスはハゲのおっさんが一代で立ち上げた大手ケータイキャリア。白を企業のイメージカラーにしている。大企業だ。世の中に付加価値を提供し、雇用も創出している。立派だ。しかし、それは彼が不細工に生まれたから成し得たのだということを忘れてはならない。俺だって不細工に生まれていれば、そのくらいのことはやっている。九時に現地集合なので、まだ二時間ある。しかし、俺はアデイドスのスーパースターにむぎゅと足を通し、扉を開けたのである。

太陽の光は淡く、白く、成層圏を突き抜けていた。

宇宙の中ではちっぴけな俺。

俺の小さな物語。

集合時間は九時だが、俺は八時に着いた。それからきつちり一時間待った。待ちくたびれた。すでに少し嫌になっている。働くというのは大変なことである。なめてはいけない。

九時を過ぎた時、男が一人、女性三人の四人が四ツ谷駅方面から歩いてきた。談笑している。男性がおそらくディレクターだ。二十代後半と思われる。まだ幼さを残した不細工なやつで、背は一七〇センチ強。デブ、丸顔。黒いスーツをぴちぴちに着こなしている。いや、着こなしていない。はちきれそうだ。おかっぱ風の黒髪がやけにさらさらしている。歩くたびにゆれる。さらさら。さらさら。シャンプーはティモテだろうか？

女性は、全員二十代だと思われる。おそらく、コンパニオンだろう。コンパニオンをするくらいだから、すごい美人、いやすごい美人とはいかずともそれなりの美人が来るのかと思ったらそうでもなかった。三人とも華やかさはない。素朴だ。顔、体型、ファッション、雰囲気のトータルで見ても、中の中から中の上といったところだ。俺とは釣り合わない。

ほっそりした和風の顔立ちの女と、むちっとした、化粧派手目だが、やや目の離れた深海魚風の女、そして、若くて肌はきれいだが笑うと歯茎が見える女。俺の恋人にしてほしいと頼まれれば、やはり釣り合いというものがあるので、全員お断りだが、一晩だけのセックスであれば、抵抗なくできる容姿ではある。

特に和風の女は、美人ではないが、ミニスカートから美しい形の足が覗き、俺の性欲を刺激する。俺は和風の女の股に顔をつつこみ、じらしながら、太ももの内側、足のつけね、アナルのまわり、ワギナのまわり、そしてクリトリスと、徐々になめあげていく様を想像した。女は快感を積極的に受け入れ、両手の指で、股間にある俺の

頭を撫で、髪をかきむしるだろう。そして、より快感を高めようと、俺の頭をぐいぐいと股間に押し付けるだろう。俺は夢中になって、舐めて吸い、その後で指を入れてGスポットを探そうとするはずだ。

四人は相変わらず談笑をしながら、俺のほうへ歩いてくる。ディレクターと思われるさらさら髪の不細工な男は、数メートル手前で、俺を認識しているにも関わらず、俺には笑顔すら浮かべない。社会人失格である。

「おはようございます」社会人の先輩として、手本を示すべく俺から挨拶をした。

男は小声で「おはようございます」と返した後、「安田さんですよ」と聞いてくる。笑顔は浮かべない。さつきまで、コンパニオンに向けていた笑顔はどこへ行ったのだろうか。

やはり俺が美男であることで、このディレクターに対しても悪い印象を与えているのであろうか。しかし、仕方がないではないか。俺だって好きで美男に生まれたわけではない。生まれて成長したら美男だったただだ。年下と思われるディレクターに説教をしてやりたいと思うが、まだ早い。いずれ、男は俺の部下になるのである。その時にしっかり指導してやろう。

「はい」

「社長から聞いてます。今日の仕事内容については聞いていますか」「いえ、現場ディレクターの指示に従うように聞いてきました」

「ああ、あそうですか。今日はティッシュ配りをメインでやってもらおうと思っています」

「ティッシュ配り？」

「はい。詳しくは後で説明しますね。あ、そうだ。自分は長谷川です。今日はディレクターをやらせていただきます。それで、彼女達がコンパニオンの」

ディレクターは女三人をちらりと見た。

「坂井です」和風の女が笑顔を浮かべて言った。ストレートに俺へ

の好意を表現してくる。俺は女のこういう態度に慣れているので、眉ひとつ動かさない。

「浜野です」深海魚風の女は笑顔も浮かべずに言う。おそらく美男を前に緊張しているのだろう。

「遠山です。よろしくお願いします」最後に笑うと歯茎が見える女。歯茎は見えなかった。あえてクールな態度で俺の関心を引こうと言う屈折した愛情表現だ。

俺は全員に向かって「よろしくお願いします」と爽やかな笑みを言い放った。

しかし、美男であるということはなかなかしんどいものである。俺は最初の挨拶だけで、女三人の心を驚掴みにし、ディレクターの嫉妬心に火をつけてしまった。いつもこれで失敗する。不細工の嫉妬、そこからくる嫌がらせによって、仕事を続けられなくなってしまう。心が折れてしまう。しかし、今回は少し事情が違う。今日一日だけで見れば不細工な男がディレクターで、俺は新人アルバイト。立場は向こうのほうが強いかも知れないが、俺は社長、山中の旧友であるし、「ぜひ、仕事を手伝ってほしい」と言われているのである。言わば、ディレクターの上司のようなものである。上司に対して嫌がらせなどできない。もし、失礼があれば、俺の権限でもって首にしてやることもできる。

ふふふ。

自然と笑みがこぼれてきた。

第八話

五分後、ハードアクセスショップ四ツ谷店店長が出勤してきた。アラウンドフォーティーと思われる人の良さそうな男だ。

俺たちは店の鍵を開けてもらい、店内の一室を借りて、男女が交代し着替えをした。女達のユニフォームは白いパンプスに白いミニスカートとぴったりしたジャケットで、なかなかいい。期待よりもかなりいい。セクシー。

俺の中で女達のランクが中の中から、上の下に格上げされた。

特に「坂井」と名乗った和風の女は、綺麗な足が、タイトなミニスカートと、パンプスで強調されており、ますますいい。

俺はじゅわつという音とともに、睾丸から精子が染み出すのを感じていた。

一方、俺とディレクターのユニフォームはいたってシンプルであった。ただハードアクセスのロゴが入った白いウィンドブレーカーを羽織るだけ。下はもともと履いてきたチノパンとスニーカーでOKだった。俺は鏡にウィンドブレーカーを来た姿を映して見せた。イケている。

服事態はまったくこうよくはないが、もとがいいので、様になっっている。

ディレクターは、と見ると、やはりピチピチだ。

髪はさらさら。

服はぴちぴち。

ダメなやつは何を着ても似合わない。

人生は不公平だ。

どんまい。ライフ伊豆ビューティフル。

その後、ディレクターの指示に従い、イベント開始の準備をした。ブース設置。

店の前に携帯電話展示台を設置、携帯電話の電源をオン。携帯電話は盗難防止の鎖で台につなぎ、台を風船やポップと言われる販促ツールで装飾をする。三十分ほどで設営は完了し、店の外観はなかなか華やかになった。

イベントの仕事、なかなか楽しいような気がする。俺に向いている気がする。

その後、店の朝礼に参加し、十時三十分、店の開店と同時にイベントもスタートした。

終了は午後六時三十分。

「じゃあ、安田さんは、あそこの交差点に立って、声を出しながらティッシュ配りをお願いします」そう言つて、ディレクターはポケットティッシュ一箱と、手持ちのティッシュを入れる紙袋を俺に手渡した。

店から交差点まではおよそ五十メートル。

俺はその距離をティッシュが入った段ボール箱を抱えて移動しながら、実は釈然としない思いがあった。

今まで、ディレクターと、コンパニオン三人、そして俺の五人でイベントスタッフだった。

出会つて二時間弱とは言え、仲間のはずである。

それが、俺一人がティッシュ配りをさせられるのである。そこはかとない孤独。

店を見ると、イベントブースの前でディレクターと三人のコンパニオンが談笑しているのが見える。ディレクターがしょーもない冗談を言い、深海魚風の女が笑いながら、ディレクターの腕にタッチした。ディレクターは「やめろよ」と、言うように逃げるふりをしつつ、嬉しそうだ。

あいつら、絶対セックスをしている。破廉恥極まりない。

俺は交差点に一人。ぼつねん、と。

白いウィンドブレーカーを着ているのが馬鹿のようである。

さらに、思う。

三十を超えてティッシュ配りをするのはいかなものだろうか。こんな仕事は、高校生や大学生の小遣い稼ぎではないだろうか？

俺は、一流大学を出て、一部上場の証券会社に勤めた人間である。イケメンエリートである。そんな俺にとって、ティッシュ配りなんて、言っただけ悪いが、レベルの低い仕事だ。俺のような人間には似つかわしくない。

それを、ディレクターは俺一人にやれと言っている。確かに、イベント当日は現場ディレクターの指示に従えとは言われているが、明らかにこれは美男である俺に嫉妬した不細工なディレクターの悪意ある嫌がらせである。

そう、思うが、開始早々ディレクターに文句を言うのも大人げない気はする。

それに、俺はまだ、山中の会社の正式な社員ではない。ここで、無意味なトラブルを起こせば、「やはり、安田はこの仕事に向いていない。安田を雇うのはやめにしよう」という判断にもつながりかねない。そうすると安定した収入はパー。

俺は、いい年をした二ートになる。

そう考えて、嫌々ながらもティッシュを配ることにした。

こうなれば早めに配り終えて、その後、茶でも飲みながら楽をするのが得策である。

第九話

四ツ谷駅からハードアクセスショップ方面に向かう人は、だいたい一分間に十人程度。

ティッシュは五百個あるので、テンポよく配れば一時間もあれば配りきる計算になる。楽勝である。

俺は、歩道の脇に立ち、往来の人の流れにティッシュを差し出した。

サラリーマンは素通りである。俺の姿が全く目に入っていない。こいつ、ド近眼だろうか。

ところが次の〇しも見事に俺をスルー。次の〇しも、その次の〇しもスルースルー。

もしもし、わたしはここにいますが。心の中で呼びかけるが、その声は届かない。

その後、俺は同じ姿勢のまま五分間ティッシュを差し出し続けた。サラリーマンと〇しを通り過ぎる。だいたい五十人は通りすぎた。全員ケータイを弄ったり、ポケットに手をつっこんだりして、歩いている。行儀が悪い。

彼らは誰一人、俺をちらりとも見ない。

ふと気がつくと、隣にディレクターがいた。俺の方をじっと見ている。

「安田さん。声出してますか？」ディレクターは冷たい声で言う。

「え？ 声ですか」

「ええ、声を出しながらって言ったでしょ」

そう言われてみると、言われたような気がする。

「声を出しながらやってみて」

しかし、声を出せと言われても、そんな漠然とした指示ではこっちも困る。どういふトーンで、どんな声を出せばいいのか。その辺

を具体的に指示しなければ、こっちもやりようがないではないか。こいつはディレクター失格である。所詮人の上に立てる人間ではない。

「声を出すってどういうふうにやるの？」俺は非難の意味を込め、また生意気な口をきくディレクターにこちらで、立場を明確にしておかねばならないと思い、ため口に切り替えて言った。

すると、ディレクターは「はあ？」と呆れたような声を出した。その声に、驚き、怒り、そしてびびり、俺は膝をがくがくいわせた。しかし、しかし、ここで、なめられてはいけない。いけないのだ。なんせ俺はこいつの上司だ。

いや、今は違うが、まあ、ほぼ上司のようなものなのだ。

「いや、声を出せて言われても、それだけじゃわかんないじゃん」俺は、攻撃の手を緩めずに言った。

「安田さん。歳いくつ？」ディレクターは悠然としている。俺の不快であるというメッセージが伝わっていないのであるのか？

「いや、俺の年齢は関係ないでしょ」

「関係ありますよ。もう二十五超えてるんでしょ」

あっているが、正確には三十を超えている。

「そのくらい自分で考えられないですか。もう、手本見せますから」ディレクターはそう言つて、俺の手から、ティッシュの入った紙袋をひったくった。そのまま、駅の方を見つめる。歩いてくるサラリーマンが、十メートル手前に来た時、「おはようございまーす。ハードアクセスショップ四ツ谷店でーす。本日キャンペーンやつてまーす」快活な声でアナウンスした。そして、素早く進路にティッシュを持った手を差し出す。まさに、今、サラリーマンはディレクターを追い越そうとしている。そして、すれ違い様、サラリーマンは手の位置に差し出されたティッシュを掴んでいた。

その後、ディレクターは続けて、十人の通行人に声をかけた。そのうち、三人がティッシュを受け取った。

「ほら」ディレクターはそう言って、紙袋を俺にぞんざいに戻してきた。俺は、それを受け取りつつも、怒りにはらわたが煮えくり返っていた。

何故、そんな言われようをしないといけないのだろうか。何故、こんな乱暴なティッシュの渡され方をしないといけないのだろうか。原因はわかっている。

俺が美男で、こいつが不細工だからだ。
嫉妬しているからだ。

さらに、自分と肉体関係のある深海魚風の女を含め、三人の女が全員俺に気があるからだ。

俺は覚悟を決めて、ディレクターに説教をしてやることにした。
「ちよっと、そんな渡し方する必要ないでしょう」

ガツンと言ってやった。腐れ不細工ディレクターめ。俺との人間としての格の違いを思い知り、泣いて許しを請うだろう。しかし、今まで失礼な態度をとってきたお前に責任がある。俺は簡単に許してやる気はない。

さあ。どうする？ 謝るか。若造。

「じゃあ、ティッシュ配りお願いしますね」ディレクターはそれだけ言い残し去って行った。

第十話

店の前に戻ったディレクターは、先ほどと同じようにコンパニオンと談笑を始めた。そして、時折、俺のほうを見ながら笑っている。俺はティッシュ持ってポツン。

ひとりポツン。

ティッシュを配るというミッションだけが残されている。

やってられないが、それでもティッシュを配らなければならない。安定した収入。明るい未来。全てはこのティッシュに託されている。

泣く泣く、ティッシュを手に取り、通行人に向かって差し出した。だが、声は出ない。ディレクターは声を出せという。快活な声を。明るい声を。そのイメージとフレーズはさっきのディレクターを見て理解した。俺は頭がいい。理解力がある。しかし、どうしても声が出てこない。

俺は、俺は、路上で大きな声を出すなど恥ずかしいのだ。

延々と誰も受け取らないティッシュを通行人に向かって差す。

そして、そのまま、一時間がたった。誰も俺のティッシュを受け取らない。俺はティッシュを握りしめた手を伸ばし、道の真ん中に立ちつくしているだけだ。

振り返ると、再びディレクターが立っていた。腕を組んでこっちを見ている。

「安田さん。もういいですから」

俺は一言もなかった。心が折れていた。

もうティッシュ配りはたくさんだ。

こんな生産性のかけらもない苦行のような真似をして一体何になるというのだ。このまま、ティッシュを手にも道端に立ちつくしていれば悟りでも開けるといえるのか。

ばかばかしい。

ディレクターはそのまま、ブースに戻って、和風の女を連れてきた。

「今日は酒井さんティッシュ配りよろしく」

和風の女は、素直に紙袋を持ち、ティッシュを配り始めた。俺のほうはちらりとも見ない。

「えっと、俺は？」

俺はディレクターに聞いてみた。ティッシュ配りが女の担当になったということであれば、俺には、本来女がやるべきだった仕事割り振られるべきだろう。それがチームプレイというものだ。

しかし、ディレクターは答えなかった。そのまま、店前のイベントブースへと歩いて行く。俺は仕方なくその後を着いて行った。ディレクターはネットクストラップで最新式の携帯電話を数台首から下げて、道行く人に声をかけた。「ハードアクセスの最新ケータイ。お試しになりませんか？」

女達も、同じように首から下げたケータイを往来の人に見せつけたり、マイクを片手に、ハードアクセスのケータイ電話がいかに素晴らしいか、演説を打っている。

俺は、なすことなく、ブースの横に突っ立っていた。

また、一時間が経過した。

十二時三〇分。

コンパニオンは交代で昼食休憩に入り、五分前に、深海魚風の女が昼食休憩に入ったところだった。俺も腹が減った。

「あの、俺、飯食いたいんだけど」社会人として、黙って戦線離脱するわけにはいかない。俺は、ディレクターに休憩に入る旨を打診しようとした。

「安田さん。まだいたの？」

「まだいたの。とは？」

「いや、もう帰ったと思ってました。というか、今日はもう帰って下さい」

「だって、仕事は六時三十分まででしょう」

「仕事って、安田さん、何もしてないじゃないですか。ティッシュ配ることもできないじゃないですか？　ここにいて何をするつもりですか？」

「さあ、ディレクターの指示に従うように言われているから、それを考えるのは君の仕事でしょう」

「はあ？　あんた頭大丈夫か？　いい年をした大人が、それで恥ずかしいのか？　そんな態度なら、はつきり言うけど、居ても邪魔なんで早く帰ってよ」

不細工がさらさらの髪をゆらしながら、理不尽な怒りをぶちまける。

俺は、大人として冷静に対応するつもりだったのだが、ディレクターの怒りのテンションに、引つ張られて、我を忘れた。

「てめえ、邪魔ってどういうことだ？」

「そのままの意味だよ」

「そのままの意味ってどういうことだよ」

「だから、何もできないし、そもそも何もする気がないんだから、そんな体でいられても邪魔、迷惑だって言ってるの」

「それは建前でのことだろう。本当はお前、あれだろう。自分がイケてないからって、俺に嫉妬して嫌がらせをしてるんだろう。なんで俺がティッシュ配りなんだよ。ちくしょう。いいよ。帰ってやるよ。後で、ほえずらかくなよ」

捨て台詞を残し、俺は店内で着替えをし、帰途についた。

三時間三十分で今日の業務終了。アルバイト代は三五〇〇円。場末のキャバクラ一時間分。

第十一話

俺はむかむかした気持ちのまま歩いた。

電車に乗るのもイライラするので、外堀沿いを北に向かって歩くことにした。

市ヶ谷の釣り堀を通り過ぎる。

腹が減っていたことを思い出し、富士そばでかつ丼セットを食べた。

ごはんを口にかきこみ、そばをすすってもまだ怒りがおさまらない。

店を出て、外堀の対岸を見ると、大きなビルが見える。出版社。

十九歳の頃。熊本から東京に出てきた時のことを思い出す。

俺は激しく東京に憧れていた。

東京に何かあるのかは知らない。

でも、きっと何かがあるのだと信じていた。形のないもやもやが、

突き抜ける白い光のようなものが。

夢叶い、東京で暮らして十年。

そこには何もなかった。

あるのは、俺の顔への嫉妬だけだ。

世界は、俺への嫉妬と悪意で構成されている。

しかし、あのディレクター。ふざけている。

このまま済ませるわけにはいかない。

あんな男が居座れば会社にとって損失である。

やつは会社のガンである。

会社や社員の健全な成長を妨げている。

山中に言って、あいつをやめさせなければ。

いや、しかし……。

そこで、俺はある可能性に思い至る。恐ろしい可能性に。

俺は美男。ディレクターは不細工。そして、山中も不細工だ。そこにはある構造が存在する。

何度も経験してきたことだ。

美男対不細工。

不細工による美男の迫害。

そうだ。

もしかして、これは山中のシナリオではないか。

俺に仕事を紹介すると、甘い言葉でたぶらかし、合法的に俺に嫌がらせをする。手が込んでいるが、そうであれば、納得が行く。

思えば、今日のディレクターの態度はあまりにもひどかった。

何故、俺がティッシュ配りをしなければならぬ。俺にはもつと向いている仕事があるはずなのに、あえて、一人孤独にティッシュ配りをさせられた。

それは、山中からディレクターに指示があつたのではないだろうか？

俺は、山中の心の闇、その暗さに戦慄を覚えつつ、さらに怒りの炎が燃え盛ってくるのを感じていた。

携帯電話で山中の番号を呼び出し通話ボタンを押す。五コール目で山中は出た。

「はい。山中です」

「安田だ」

「おお、安田。今日イベント入ってるんだよな。どうだ？」

「どうだじゃねえよ」

「何？ 何かトラブル？」

「何で俺がティッシュ配りなんだよ」

「ティッシュ配りって？」

「あの、生意気なディレクターのやつが、俺にティッシュ配りばかりさせるから、腹が立って帰ってやった」

「は？ お前、イベント途中で抜け出したの？」

「ああ、それからお前にも話があるんだけどな」

「いや、それより、イベント途中で抜け出したらまずいだろう。ちよつと待つとけ。今、長谷川に確認するから」

そう言つて、山中は一方的に電話を切った。

俺は、そのまま歩き続け、飯田橋の歩道橋にさしかかった。

このまま、歩いていくと、四十分ほどで家に着くが、俺は歩道橋の上に登り、眼下を流れる車を眺めることにした。

ワンボックスが走る。ミニバンが走る。エコカーが、ハイブリッドカーが走る。

公道は時代を象徴しているようだ。

エコの時代。優しい心。

そのまま山中からの着信を待つ。あるいは、山中の電話によってディレクターが改心し、俺に謝罪すれば、戻ってほしいと願うのであれば、考えないでもない。

そうなった場合を想定すると、あまりイベント会場から離れないほうがいい。

俺はディレクターにチャンスをやろう。

向こうが、自分の非を素直に認めるのなら、俺も大人げない対応をしたことを、大人の冷静さでもって謝り、お互いに認め会おう。

美男と不細工。

そんな壁はとっばらった、人間としての付き合いをしよう。そう考えていた。

すると、電話が鳴った。

「はい。安田」

「あ、俺、山中だけど」

「あいつ何か言ってたか？」

「だいたいの事情はわかった。お前今日はもう帰っていいから」

「あいつ謝ってなかったか？」

「ちよつとお前と話したいんだけど、昼間は忙しいから、今日の夜空いてるか？」

「ああ、俺もお前に言いたいことがあるんだ。あのな、お前俺のと・・・」

「ちよつと今忙しいから、後で連絡するから。じゃあな」

山中は俺の質問に取り合わず、一方的に言いたいことを言い、電話を切った。

友達をなと思っているのであろうか。友に、なんという態度をとるのか。

やはり山中は黒だ。

黒幕だ。

美男である俺への嫌がらせのために、会社ぐるみの策を巡らし、俺を貶めた。

今ごろ、ディレクターの労を労いながら二人でゲラゲラと笑い転げているだろう。

「やったぞ。俺たちはやった。イケメンに思いしらせてやった」

「やりましたね。社長。僕たち不細工の勝利です」

「だいたい、俺は学生の頃からあのかっこいい顔が気に入らなかったんだ。あんな、美男がこの世に存在していい道理がない」

「ええ、ええ。全く社長の言う通りですよ。これからもどんどんイケメンをイベントに参加させてください。自分がいじめぬいてやりますから」

「長谷川。お前は悪いやつだよ」

「いえいえ、社長にはかないませんよ」

「だいたい、イケメンは、俺達のような不細工が社会を運営させているからなんとか生きていられるのにその自覚がなさすぎる」

「おつしやる通りです。自分達不細工が道を歩くときは、歩道の脇にひざまづいて、頭を下げるくらいのはするべきなんです。しかし、あのイケメンの情けない様といったら、ああ、思い出しただけで笑いが込み上げてきますよ」

「何？そんなに情けなかったのか？ そこのところもつと詳しく教える」

あいらはそう言って、一晩でも飲み明かすだろう。

それほどに、不細工の美男への嫉妬は強い。

ああ、神。

神はいないのか。

何故、美男に生まれたというだけで、こんなにも人の恨みをかい、苦しまなければならないのか。

俺は、歩道橋の上から洋服の青山を見下ろし絶望していた。

洋服の青山の店先にはハンガーラックがあり、ださいアウターが吊るされていた。

段ボール紙にマジックで一〇〇〇円と書かれている。

アウターはどれも、デザインも品質も悪そうな、見るからにB級品だ。

風になびくアウター。

その中のひとつは、緑色のミリタリージャケットだった。

思い出す。ミリタリージャケット。

思い出す。あの男を。

洋服の青山にはぱらぱらと中年男性が入っていく。

その時、俺はわが目を疑った。
人々の行き交う神楽坂へと続く坂道。それを下って洋服の青山へ
向かうドレッドヘアの若者。

ああ、神よ。願いをかなえよ。

あのドレッドヘアにミリタリージャケットを着させてもらえない
だろうか？

しかし、ドレッドヘアは前方をしっかりと見据えている。

彼は若者。

希望に満ちた若人。

未来へ続く道しか見えていない。

土台無理な話だ。

洋服の青山なんかに、ミリタリージャケットなんかに興味を示す
はずもない。

その時、青山の入り口、その自動ドアが開いた。
ウィン。

店員と思しきスーツを着こなした中年男性が出てくる。男は両手
の平を胸の前で軽く合わせ、叫んだ。

「ただいまアウター〇〇〇円セール実施中です。どうぞお手に
とってご覧下さい」声に誘われ、若者は店を見た。店前に置かれ
たハンガーラックを。

そして、そして、のろのろと、歩いていったのである。
しばらく、ハンガーラックの前で立ち止まるドレッド。
そして、そして、手に取ったのである。

ミリタリージャケットを手に取ったのである。
「よかったら御試着ください」更に店員が言う。

ドレッドヘアは無表情でミリタリージャケットを羽織った。
よく似合っている。

俺はその様を見ながら涙が流れて来るのを止められなかった。

神はいる。神はおわす。東京に、文京区に、飯田橋に。

あなたは確かにここにいます。

ドレッドヘアの若者が神であり、麹町の主が神であり、ドレッド
ヘアの若者は麹町の主である。

三位一体。

俺は心にわずかの希望の光が灯るのを感じながら、風に吹かれて
いたのである。

第十二話

夜になった。

俺は自分の部屋でテレビを見ていた。

液晶画面には、イケメンアイドルタレントが、動物園に行つて、臭くて汚いカンガルーの世話を強要させられる番組が流れていた。

カンガルーは凶暴で、餌をもらったお礼のつもりなのか、アイドルタレントにキックを入れている。

理不尽極まりない。

不細工なコメディアンはスタジオで、モニターを見ながら、ゲラゲラと下品に笑う。

危険も、苦勞も全くないセーフティーな場所から、嘲る。

自ら苦勞を買つて出た、ボランティア精神溢れる男が、ひどい目にあつた、散々な目にあつた、ああ、愉快でたまらないと言つて笑っているのである。

アイドルタレントも困つた表情を浮かべ、仕方なしに笑っている。

そして、俺の携帯電話がヴーン、ヴーンと振動した。山中だ。
「もしもし」

「山中だけど、今大丈夫か？」

「ああ」

「お前今、家？」

「ああ」

「家つて、目白でいいんだっけ？」

「ああ」

「ちよつと、ゆっくり話したいんだけど俺んち来ないか？」

「お前んちつてどこだよ？」

「早稲田。明治通りと、新目白通りが交わるところに、レンタルビデオ屋があつただろ。そのマンション。そこからだと歩いて五分く

らいだろ」

俺は「わかった」と言つて、携帯電話の通話終了ボタンを押した。山中のやつ、こんなに近くに住んでいたとは。

驚きだ。

知らなかった。

そもそも、俺達と一緒に暮らしていた学生寮は、俺のマンションからも、山中のマンションからもほど近い。

目白台にある。

余談だが、村上春樹も学生時代の一時期、その学生寮で過ごしたらしい。

俺達は、大学を卒業して、八年がたった今でも、あまり遠くに行けていない。同じ生活圏から抜け出せていない。

気がつかないうちに、何かに縛られているのだろうか？

それとも、あまり関係ないのであるのか？

山中が俺の家に来るのではなく、俺が山中の家に呼び出されたということに、少しひっかかったものの、そこで言い争いしても仕方がないと思い、俺は素直に山中の家に行くことにした。

四ツ谷から帰ってきて着替えもせずに、コムサの白シャツ、チノパン、カーディガンという服装だった。

どうせ、すぐ近くなのだからそのままの格好で外へ出た。

意外な誤算。

夜は冷える。

しかし、家に戻って、上着をひっかけてくるのも面倒臭く、俺はそのまま、山中のマンションへ向かった。

夜の八時五分。

道は明るい。

俺の歩く道は街灯の光が照らし、家には温かな灯りが灯っている。車とバイクがひっきりなしに道路を通り、ヘッドライトが追い越

して行く。

俺の影は薄く、長く伸びては消えていく。

強い風が吹く。

風は俺を包んで通り過ぎていく。

その度に俺は身震いした。

十分歩き、山中の居住する早稲田のマンション、そのエントランスに着いた。

ケータイで山中にその旨を伝え、オートロックのガラスでできた扉を開けてもらった。

部屋は二二階。

建物は古く、エレベーターのボタンは白くて丸い、チープなプラスチックでできていた。

数字が記された丸。

縦に並ぶ小さい丸。

古いエレベーターはガツタンという音を立て、二二階に着いた。

廊下を歩き、山中の部屋を探し当て、ドアを開けた。

「こんばんは」と声をかけると奥のほうから「おー、入ってきて」と、山中の声が聞こえた。

声のするほうへ歩いて行く。

山中は広いリビングに立っていた。

仕事から帰ってきたばかりなのか、ネクタイを外したYシャツに、スーツのスボンという格好だった。

リビングはおよそ一五畳。

フローリングの床に、六畳ほどのラグマットが敷かれ、その上にL字型のカウチソファとローテーブルが設置されている。

全て、茶色やベージュで統一されており、品もセンスも良かった。さらに、山中も独身であるはずなので、俺と同じようにワンルームに住んでいるものと決め付けていたのであるが、どうもそうでは

ないようである。

リビングからも部屋に通じると思いきドアが二つ見えているし、先ほど玄関からは、もうひとつ別の部屋が見えた。

つまり、リビング以外に三部屋あるということである。

三LDKということである。

俺は、またしても自分が山中の狡猾な罠にはまりこんでしまったことに気がつき、唇を噛んだ。

山中はおそらく、自分が3LDKという、独身者が住むにはあまりに広く贅沢な部屋に住んでいるということを目撃したがつていたのであろう。

そこへ俺という絶好のカモが見つかったわけだ。

話があるというのなら、俺の部屋ですることもできるし、どこか店ですることでもある。

そういつた選択肢を全く挙げずに、山中は突然自分の部屋へ来いと俺を呼びつけた。

俺は疑いもせずに素直にOKの返事をした。

なんと甘さだろう。

きつとこれから、山中の部屋自慢が延々と始まるはずである。

「いやー、独身で3LDKのマンションに住んでいるのは俺くらいのものなんじゃないかな？ 田村なんかは1LDKのマンションに住んでるらしいぜ。よくそんなウサギ小屋みたいなところに住めるもんだよな。全く、もっと人間的な生活をしろよと、この間、アドバイスしてやったよ。でも、未だに1LDKに住み続けてるらしいぜ。田所なんて1Kだって言うぜ。笑っちゃうよな。1Kって、ぶはは。Lはどうしたんだよ。Lは。いい大人がしなしてどうやって生活するっていうんだよ。全く、ちよつとカウチに座って、ピスタチオをつまみに、ブランデーを飲みたい時、どうすんだって。まさか、ベッドとカウチを同じ部屋に置くわけじゃあるまいし。もしかして、ベッドをカウチ代わりに使ってたりにして。ぶはは。なあ。

ところで、安田は何LDK？ 安田のことだから4LDKかな？
いやいや、さすがにそれは独身じゃ持て余すか。3LDKくらいが
ちょうどいいもんな。え？ 違う？ ああ、2LDK？ ああ、ま
あそのくらいあれば人間的な生活はできるよな？ え？ 違う？
じゃあ、お前も田村と同じ1LDKなのか？ 大変だな。まあ仕事
を頑張れば俺のように3LDKに住める日が来るから、頑張れよ。
え？ 違う？ もしかして、お前も田所と同じ、いや、まさかとは
思うけど。だって、お前、もう三十超えてるんだろう。三十超えて
1Kって。じゃあ、カウチは？ ない？ ピスタチオは？ 食べな
い？ へえー。まあ、そういう生活もありかもな。へえー。1Kね
え。まあ、今日は俺の3LDKで寛いで帰ってくれよ。ぶふっ」
目に浮かぶようである。

俺がげんなりした表情を浮かべていると「まあ座っててくれよ」
とカウチソファに座らされた。

ここは先手必勝である。山中が部屋自慢をするというのであれば、
早めにその話題を終了させてしまうに限る。

山中の自己顕示欲を満足させてしまうに限る。

さもなければ、延々と部屋自慢をするきっかけを探そうとする山
中と、それを阻止しようとする俺の攻防が続き、朝まで決着がつか
ず、疲労困憊して、ほうほうの体で帰途に着くという可能性もある
のである。

ここの一番、負けるが勝ちという場合もある。

「いやー、山中。いい部屋だなー。3LDKか？ いやー立派だわ
ー。山中まだ独身だろう。独身で3LDKに住んでいるやつはそう
はいないぞ。いやー立派だわー。この家具もまたセンスがいいもん
な。茶系で統一しちゃって。落ち着くわー。俺もこういうカウチが
欲しいと思ってたんだ。ここで、ピスタチオでもつまみながらブラ
ンデーでも飲んだら最高だろうな。家に帰ったら速効調べてみよう。
俺もひとつ買っちゃうかな？ ははっ」

ふう。

これだけ持ち上げれば大丈夫だろう。

山中はウーロン茶とグラスを2つ持ってきてながら、「そう?」と言った。

どきどきしながらその後の展開を待ったが、何も言っていない。

どうやら山中の自己顕示欲は満たされたようである。

第一ラウンドは俺の勝ちだ。

さらに山中は、高級菓子が盛られた皿をローテーブルに置き、L字型のソファの短いほうに腰を下ろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3347q/>

憂鬱なイケメン

2011年2月21日00時55分発行